

浄土

1995・7



お盆と日本人◇山折哲雄

法然上人と私◇田中恒朗

【連載】

教育の現場から——内堀照夫

楽屋ゆかた——関 容子

念仏の系譜——須藤隆仙

共に生きる——御所野洋幸

誌上特設ぎやうりい

忘れられた寺院◆横村克宏

乱世に道を拓く人◇多岐祐介



咲いたら、幸せ。

楽しい、嬉しい。

ちょっと切ない、なつかしい。

いろんな話をしたり、聞いたり。

そんな何気ないことが、人と人との

固い絆の第一歩。

それぞれの人の、それぞれのお話に

花を咲かせるお手伝い。

安い市外電話の、0088です。

日本を楽しくする電話

0088

お問い合わせ・お申し込みは、日本テレコムお客様センターまでお気軽に。



0088-82 (無料)

または 0120-0088-82

●受付時間 9:00～23:00 (年中無休)

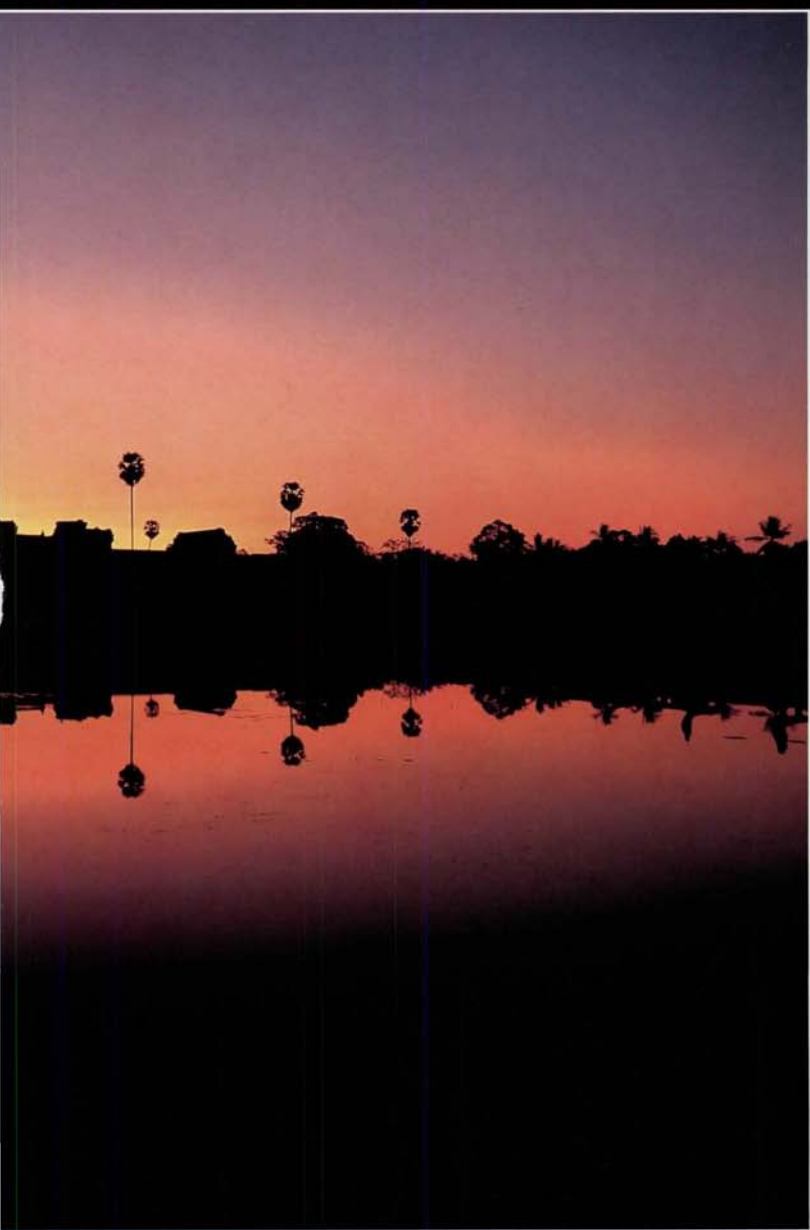
忘れられた寺院…④

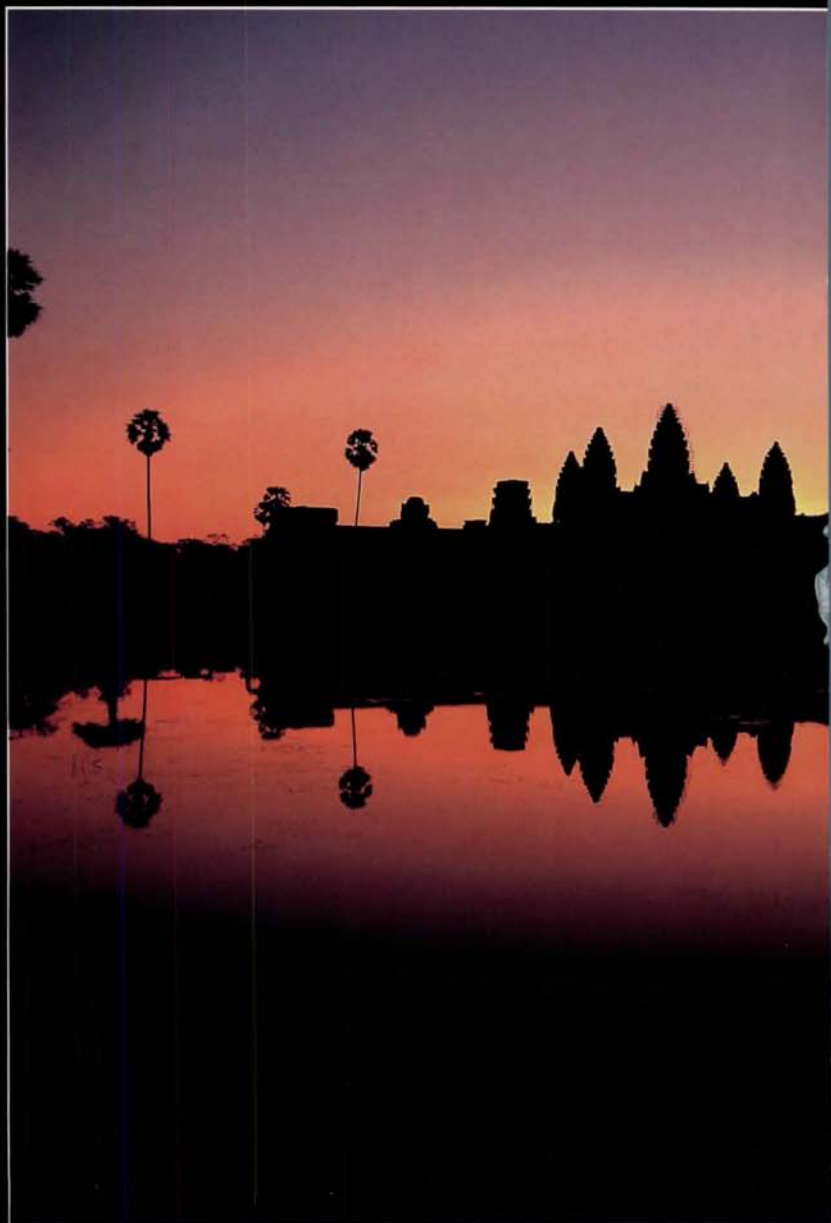
photographer

横村克宏



西正面入り口から中心塔をのぞむ。塔の高さが60メートルある。





アンコールワットの夜明け

忘れられた寺院

アンコール・ワットは人類史にとって誇るべき文化遺産である。この巨大な石造建築は正確に西を向いている。アンコールの他の遺跡のほとんどは東向きであるが、この寺院はそれと異なっている。その理由は、この寺院が葬儀を行なうための寺院として建てられたからである。

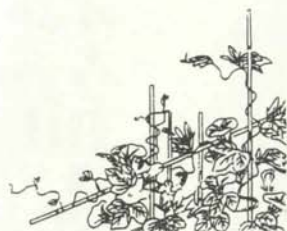
驚嘆に値するこのアジアのピラミッドもまた荒廃の悲劇に直面している。創造が人類の力であるならば修復は人類の知恵である。いま我々の為すべきことは必ずあるはずだ、との確信のもとに、写真家横村克宏氏は「アンコール遺跡―光と影―」と題する写真展を七月二日～二八日まで千葉県柏市寺嶋文化会館で開催する。



第一回廊の四面の壁はこのようなレリーフが刻まれている

浄土

1995/7月号 目次



カラーグラビア忘れられた寺院	写真=横村克宏	3
お盆と日本人	山折哲雄	8
法然上人と私	田中恒朗	16
教育の現場から(最終回)	内堀照夫	24
コラム		33
楽屋ゆかた坂東橘太郎(三)	関 容子	34
念仏信仰の系譜	須藤隆仙	42
コラム		49
共に生きる	御所野洋幸	50
Jフォーラム		57
乱世に道を拓く人	多岐祐介	58
事務局便り		69
編集後記		70

表紙題字=浄土門主 中村康隆猊下

表紙撮影=御所野洋幸

アートディレクション=近藤十四郎

盃蘭盆

お盆と日本人

山折哲雄

日本の祭りでは、大きくわけると、冬の祭りと夏の祭りが大きな役割をはたしてきたと思う。その代表的なものが冬の正月祭りであり、夏のお盆行事であった。

ともに、ご先祖の霊を迎えて祀る行事であった。先祖の霊を迎えるのに棚をつくり、草花や水を備えるとともに、その年の豊作と自分たちの健康と平安を祈ったのである。

お盆の季節になると、仏に供えるため野山から草花をつんでくる盆花迎えというならわしが、古くからあった。家の仏壇に祀っている仏のためにそうするのであるが、同時にこの季節に訪れてくる先祖の霊を迎えるためでもあった。先祖の霊はその草花を目じるしにして家々を訪れると考えられたのである。

たとえば正月の祭りというと、盆花はちょうど門松にあたるであろう。年末になると山に入って松をきり、松迎えをして家の戸口に飾ったのが門松である。

この盆花として供えられる花には、土地ごとにさまざまなものがあつた。そのなかで、桔梗ききょうや女郎花おみなえし、または萩などのような秋の七草に数えられるものが含まれていたことに注目しよう。秋の七草の風習が盆花迎えの行事のなから生れたことがわかるからである。

それでは、お盆の行事はどのようにして生みだされたのだろうか。お盆というのは盂蘭うらん盆のことである。これはインドではじめられ、中国で新しい要素を加えられてわが国に伝えられた。一般に、死者の苦しみを救うために、七月十三日から三日間（旧暦、新暦、月遅れ八月、の地域にわかれる）、仏と僧に食物を捧げて供養する仏教行事をいう。そのな

かでとくに先祖の霊を供養する点が重視されてきた。つまり亡者の霊を供養し鎮める夏祭りというところに、わが国のお盆の特色があるといえるだろう。

このお盆の行事とならんで、同じ時期におこなわれる施餓鬼会というのがあつた。これは餓鬼道に落ちて飢えに苦しんでいるもの（餓鬼）に、食物を施して供養する法会である。特別に不幸な先祖にたいしておこなう祭りであるといつてよい。

この仏教行事も、インドでおこり中国に伝えられたが、やがてわが国にもたらされた。日本ではとくに禪宗で盛んにおこなわれ、真言宗、浄土宗、曹洞宗では盂蘭盆会には欠かせない亡霊供養の一環とされるようになった。

このようにお盆と施餓鬼は、死者供養という点で共通したものと考えられるようになったが、しかしその起源はもともと別のものであつた。それが時をへて混同されるようになったのである。まず、そのへんのところから考えてみることにしよう。

お盆の行事は『盂蘭盆経』に由来する。それによると、仏弟子の目連は亡くなった母が餓鬼道に落ちて苦しんでいるのを知つて驚く。そこで釈迦のもとをたずねると、こう諭される。雨季の学習期間（安曇）が終わつた七月十五日に仏と僧に供養すれば、七世代にわたる死んだ先祖の苦しみを救ふことができること。つまりここで説かれているのは、子による父母（先祖）救済物語なのである。

この行事は中国では、梁の大同四年（五三八）に武帝が同泰寺ではじめたといわれる。

それが唐の時代になってひろくおこなわれるようになった。日本では、推古天皇十四年（六〇六）にまず宮廷にとり入れられ、それが古来の祖霊崇拜と結びついて民間の習俗になっていった。

これにたいして施餓鬼会の方はどうであらうか。この行事は日本では、主として『救拔餓鬼陀羅尼經』^{えんくがきだらにきよう}（唐の不空によつて訳された）にもとづいてひろまつた。この經典に登場する餓鬼が焰口餓鬼で、顔が醜く、やせ細つていて、口の中が炎で燃えている。その焰口餓鬼があるとき釈迦の弟子である阿難のところにやつてきて、お前はあと三日のうちに死んで餓鬼道に落ちるだろうと予言する。驚いた阿難が釈迦をたずねて教えを乞うと、陀羅尼を唱えて飲食を施すと、一切の餓鬼が救われるであらうと教えられる。

このように『救拔焰口餓鬼陀羅尼經』が問題にしているのは、もろもろの餓鬼の救済である。三界の万靈にたいする供養である。それになんとして先の『盂蘭盆經』では、餓鬼道に落ちた父母（または七世代の父母）の救済が主なテーマとされていた。お盆供養では仏弟子の目連が主人公だった。かれはその神通の力（超能力）によつて、餓鬼道に落ちていた亡母の姿を見ることができたのである。それで神通第一の目連と称されるようになったところがこれにたいしてもう一つの施餓鬼供養では釈迦の説法をよく聞く、すなわち多聞第一の阿難が主人公となっている。

しかしそういう相違点はあるものの、その二つの經典は餓鬼道に落ちた人間を救う物語

としてつくられている点では共通している。のちになって、お盆と施餓鬼会が混同されて用いられるようになった理由もそこにあるのである。

ところで、古くから盂蘭盆の起源についていろいろなことがいわれてきた。そもそも盂蘭盆というのはインドのサンスクリット語のウランバナ *Ullambana* を音写したもので、意味は「倒懸^{とうけん}」の苦しみを救うこととされてきた。倒懸というのは、逆さ吊りになったような苦しみのことをいう。あるいはこの倒懸の苦しみそのものがウランバナであるとする説もある。人間が逆さ吊りになって苦しむ姿はインドの古い伝承のなかにしばしば出てくるし、また六道絵と称する絵のなかにもそういう姿で苦しんでいる人間のありさまが描かれている。

また、盂蘭盆というのはイラン語で「靈魂」を意味するウルヴァン *Urvan* を音写したものであるかとする説もある。それが西域をへて中国に伝わったのであろうとするのである。ところがこれらの説にたいして、同時に「盆」は盂蘭盆という言葉省略したものではないかとする考えが古くからあった。たとえば民俗学者の柳田国男がそうであった。かれによれば、お盆は本来、夏の季節に精霊（亡霊）に捧げる供養の「器」のことであった。それがやがて、この器（お盆）を通して祀られるもの自体を指すようになり、盂蘭盆の「盆」の字と混同されるようになったのだという。

いずれにしても、お盆の起源についてはいろいろな要因が考えられるのであり、どれか

一つの意味に限定することはできないのではないかと思う。しかしながら、死者の靈魂を慰めて鎮めるための行事であるとする点は誰でも認めている。仏教の救済思想と神道的なタマ祭りの信仰が重なり合い、独特の行事が生みだされたのである。

わが国におけるお盆の期間は、さきにのべたように七月十三日から三日間であるが、一般的には十三日に精霊（タマ）迎えをして、十六日に精霊送りをする地域が多い。このあいだは盆棚とか精霊棚とか称する祭壇を設けて精霊を祀る。またこの期間に新しく設ける精霊棚は、過去一年以内の死者（すなわち新精霊）を迎えるところとし、その他の先祖を祀る祭壇は、家のなかの仏壇をもってあてるといふ地域もある。古い時代は、仏教と神道によるこのような分業体制がひろくおこなわれていたのかもしれない。

いずれにしろお盆と施餓鬼会の祭りがすぎると、われわれは自然に中秋の名月を思いおこす季節を迎えることになる。中秋の名月とは陰暦の八月十五日の満月をいう。それは九月の十三日の十三夜の月にたいして、十五夜の月とも呼ばれてきた。とするならば、秋がしだいに深まりゆく十五夜と十三夜は、それに先立つ陰暦七月七日の七夕が星祭りであったのにたいして、満月を観賞する月祭りの機会であったということができであろう。

夏から秋にかけての祭りが、お盆のしめやかな期間をはさんで、華やかな星祭りから清冷な月祭りへと移っていくありさまを想像してみよう。そしてその月祭りのために仮設されて舞台に、可憐な秋の七草の美しい彩りがとられる。お盆に供えられた夏の盆花が、月

祭りでは秋の七草として装いを新たにしておわれの目を楽しませてくれる。あるいはそのような草花を通して、われわれは亡き人びとをしのび、あの世におもむいた先祖たちの幸せを祈ってしまうのである。

ここで忘れてならないのは、こうした先祖の霊にたいする供養をおろそかにするとき、その先祖の霊はかならずや何らかの形で祟り^たをなすであろうという信仰があったことである。日本人の先祖崇拝にはこの祟り信仰が重要な役割をはたしていたと思う。その祟り信仰がお盆の行事にも影をおとしているのではないだろうか。

われわれが先祖の墓をたて、お盆のような時期に祭りと供養をおこなってきたのも、おそらくそのためなのである。先祖の供養をすることが子孫たるものの努めとされ、家内の安全と幸福を約束する道であるとされるようになった。家の永続と子孫の繁栄は先祖の加護によってこそはじめて可能になるということがつよく意識されるようになったのである。

ところが、第二次大戦後になって、知られているように古い家族制度が衰え、「家」の觀念がしだいに希薄になっていった。人口が都市に集中し、伝統的な家や村の生活が大きく変貌した。家族の型も両親と子どもからなる核家族の数が増え、追善供養や先祖信仰のやり方もすこしずつ変化してきたのである。一言でいえば、家中心の追善供養から小家族中心もしくは個人中心の追善供養への傾向が目立つようになった。それがお盆にたいする日本人の気持に微妙なゆらぎを与えているかもしれない。

しかしながら、そのようなさまざまな変化にもかかわらず、死者（先祖）そのものを供養しようとする気持だけは、昔も今もいささかも変わることがなかったことに注目しなければならぬ。またわれわれは、死んだ人のことをしばしば「仏（ホトケ）」と呼んできた。これはもちろん仏教の影響によるものであるが、しかしインドの仏教では「仏」はあくまでも悟りを開いた人のことをいい、死者を指す言葉ではなかった。ところがその「仏」が、わが国では死者または死んだ先祖と同じ意味に用いられるようになったのである。われわれが「ホトケサン」というとき、われわれの心のなかには仏、菩薩の姿と先祖の姿が重なって映っているのではないだろうか。

だから、われわれがお盆のような時節に先祖の前にぬかずいて、怖れかしこむ気持になるのは、仏、菩薩の前で敬虔な気持になるのとどこかでつながっているからなのだと思う。それは仏、菩薩の鏡を通して自分自身の良心と対面するということとまったく同じ態度なのである。

このようにみえてくると、日本人にとって「先祖」というのは、ちょうど西欧人にとっての「神」に近い存在と考えることができるのではないだろうか。西欧のキリスト教徒は、神の前での平等を説き、神による救済を説くけれども、それとちょうど同じように、われわれ日本人もまた先祖の前で人間の平等を考え、先祖による救いをひそかに念じてきたのである。

（国際日本文化研究所教授）

法然上人と私

我が心の師 藤吉慈海上人を偲んで

田中恒朗

たなかこうろう

特別寄稿

一 活動写真

法然上人との出会いは、私が小学校三年生か四年生のとき、郷里（山口県）の田舎町の「芝居小屋」で見た活動写真でした。今という映画です。私たちはカッソーと呼んでいます。何という題だったかは覚えていません。もちろん無声映画で弁士が淡い声で説明しました。小学校から団体で行ったカッソーのうちの一本だったと思います。その活動写真の舞台がどこで、その時代が何時なのかは分かりませんでした、古い昔の話だとは思いました。

少年勢至丸は大きな館の一人息子です。両親と家来たちの中で幸せに暮らしています。そこへ、外部から悪者どもが夜討をかけてくるのです。屋敷の武者たちも応戦するのですが、多勢に無勢、侵入者たちは少年の父親に瀕死の重傷を負わせて引揚げます。その枕辺に母親とともに寄り添う少年に対し、苦しい息の下から父親は言います。「わしの仇を討つことを考えるな。お前が仇を討てば、敵の子はまたお前を討とうとして、殺しあいが続くことになる。お前は坊さんになって勉強せよ。」そして父親は亡くなり、少年は出家して比叡山で修行することになります。それから後のストーリーの展開は記憶しませんが、少年は偉いお坊さんになり、大勢の人々が法話を聞きに集まってくるのです。

この活動写真の、瀕死の父の遺訓の場面は今でもありありと目に浮かびます。ただ、理不尽な襲撃によって命を落とした父親が、なぜそのような遺言をしたのか、少年はなぜ復讐をしなかったのか、武士なら仕返しをするのが当然ではないか、子どもの私にはまだ十分には納得いかなかったのです。この少年が浄土宗の開祖法然上人だとわかったのはもっと後のことでした。

私は、少年勢至丸の生き方に、絵本で読んでいた牛若丸の物語を重ね合せていました。今若、乙若、牛若という三人の幼い兄弟が母常盤御前とともに雪の中を落ちて行く場面です。牛若丸は父の仇の平清盛の命令で鞍馬山に入れられて坊さんになります。ところが、どういうわけか、墨染めの法衣姿は見せません。稚子姿で夜な夜な京都の町に出てきます。そして弁慶という荒法師に出会い、「京の五条の橋の上、大の男の弁慶が……」の活劇のすえ、彼を倒して主従の誓いをさせ、後に、弁慶らを従えて兄頼朝を助け、壇の浦で平家を討ち滅ぼすことになるのです。

後のことですが、私は、少年勢至丸の父君の遺訓なるものは本当にあったのか、伝記編者の創作ではなかったか、と思ったりしました。出家は方便であつたにせよ、仏法の修練を積むうちに、仇討ちなど片々たるものだと心境に達せられたのではないか、そのほうが法然上人らしい。また勢至丸という名は阿弥陀仏の脇侍たる勢至菩薩に由来するもので、法然上人の幼名としてこれ以上のものはないのですが、父君が無量寿経や観無量寿経に通じていられたのかどうか、これも創作ではと思ったりもしました（岩波仏教辞典の「法然」の項にも「幼名を勢至丸といった」とありますから本当でしょうけれど）。

私は小学校の上級になつてから、浄土真宗のお寺の日曜学校に行きました。この日曜学校で親鸞聖人のお名前を知りました。親鸞聖人は法然上人のお弟子だということも教わりました。それでお二人は同じ時代の人だということがわかりましたし、鎌倉時代ということも国史の授業が始まってから知りました。私の家のお寺は浄土宗だったので、浄土宗と浄土真宗（単に真宗と言っていました）の違いもよくわからず、何となく親類のようなものかと思っていました。歎異抄を知ったのは高等学校に入ってからで、一枚起請

文を読んだのは、あとで申すように、知恩院山内で生活するようになってからでした。国史の先生は「ゴゴニ(五五)と百済(くだら)より」(仏教伝来)とか「鎌倉にイイクニ(一九二)作る」(頼朝、鎌倉幕府を開く)などと年代記憶の方法を教えてくださいました。仏教伝来から鎌倉幕府まで六百年を経ていることが分かりました。法然上人の浄土宗、親鸞聖人の浄土真宗、日蓮上人の日蓮宗などが、道元などによって中国から招来された禅(曹洞宗、臨済宗)とともにその時期に興ったことを知りました。保元、平治という殺しあいの乱世を思い、法然上人を始めとする鎌倉の新仏教は、それまでの貴族仏教を否定し、民衆仏教を生んだ鎌倉新仏教こそ庶民の待望する教えであつたのだ、と感じたのです。昭和十五年に紀元二千六百年の祝典が国を挙げて行われ、鎌倉仏教八百年を実感しました。

二 藤吉慈海上人

私は、中学校、旧制高校を経て昭和十七年十月京都大学法学部に入學しました。そして、縁あって知恩院山内の「華頂継志学寮」に入れて戴くことができました。この寮で藤吉慈海先生と出会いました。先生は九州の浄土宗寺院の出身で、以前にこの寮の寮生であり、京都大学文学部哲学科を卒業し、同大学院在学中に四年間兵役に服し、昭和十七年秋に除隊となつて学寮に寮監として戻られたのでした。寮には在家出家の学生十人が寄宿していました。先生とともにお念仏をしたり坐禅をしたり、掃除草取りの作務をしたり、寮監室でお茶をたてたりしました。寮母の小母さんがいてご飯を炊いてくれます。その前年に太平洋戦争が始まっていて、主食は配給制になっていましたが、まだ世の中は落着いており、京都の市中を流しのタクシーも走っていました。

昭和十八年、戦局は次第に急となり、われわれ文科系学生は徴兵猶予を停止されて直ち

に兵役に服することになりました。いわゆる学徒出陣です。私も郷里で徴兵検査を受け、十二月一日に広島防空部隊に入隊せよとの召集札状に接しました。それで、学寮を引き払って帰郷しましたが、藤吉先生は京都駅のホームに合掌して見送ってくださいました。その藤吉先生もまもなく二回目の召集で北九州の防空部隊に入隊されました。昭和二十年一月頃、私が下関の防空部隊の見習士官でいましたときに、若松市高塔山高射砲陣地に先生を訪ね、つかの間の再会を得ました。日暮れどきてした。

念仏に暮舎を訪へば灯の揺れて陸軍中尉藤吉慈海師

先生が遷化された直後に當時を思い出して詠み浄土宗の新聞の短歌欄に投稿したものです（平成五年九月号に掲載されました）。陸軍中尉の先生は個室の一隅に正座し、掌に入るほどの小さい木魚をピコピコ叩いて念仏していらっしゃいました。先生は本当に念仏の行者でした。

終戦より召集解除となった私は、昭和二十一年四月に復学して学寮に戻りました。藤吉先生も寮監として戻られ、応召していた仲間たちもぼつぼつ帰ってきました。京都は戦災を受けなかったのですが、生活のやりくりは大変でした。尼衆学校に配給されたアメリカ軍用のミート罐を戴いたり、山中越えをして大津方面に買出しに行ったり、ご飯の中に大根を入れて分量を増やしたりしました。藤吉先生以下、全員で華頂会館の掃除に行き、いくらかの報酬をいただいて食費の足しにすることもできました。掃除のあとみんなて般若心経を唱えるのですが、先生の一灯園でのご経験に発するもののようにしてした。

お勤めのなかで一枚起請文と一紙小消息は繰返し拝誦しました。「観念の念にもあらず又学問をして念のころをさとりて申す念仏にもあらず」「たとひ一代の法をよくよく学

すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらに同じうして、智者のふるまひをせずして、ただ一向に念仏すべし」とありますのは、絶対他力の道なのだと思いますが、難解でした。先生は、ただ、ただ念仏するのですといわれました。

その後の藤吉先生は禅浄両修の仏法者および学者として世界的に活躍され、多くの著書や文獻で広く知られています。先生も私も幼くして父を失っていて、境遇が似ているところから、その間もずっと親しくしていただきました。私は司法修習生を経て、昭和二十五年に裁判官になったのですが、機会あるごとに京都に参上し、藤吉先生のお話を伺うのを楽しみにしていましたし、先生も喜んでくださいました。先生はインド留学から帰国された昭和二十八年末頃から、知恩院山内の樹昌院に止宿していられ、その後、同院の住職になられました。ずっとお独りの生活です。

昭和五十三年十月、先生は岡崎市の大樹寺の住職になられ、さらに昭和五十八年十月鎌倉の大本山光明寺に百十世法主として晋山されました。その頃は先生はお元気でした。昭和六十年八月、先生は盛岡市の大泉寺で暁天講座をなさると聞きましたので、当時、仙台の裁判所に勤務していた私は、早期の新幹線で盛岡に行き、そのお寺で先生にお会いしました。先生は白内障と眼底出血のため完全失明の状態になっておられ、小僧さんに手をとられて本堂に入ってこられました。淡々として同称十念をなさり、おだやかな声で「一紙小消息」の講話をなさいました。

翌昭和六十一年三月、私は裁判所を退職して、東京都町田市に移り、東海大学法学部教授になりました。そのころ町田市の浄土宗養蓮寺に入檀させていただいたのですが、鎌倉に近いので、しばしば光明寺の方丈に先生をお訪ねしていました。先生は手術により、度

の強い眼鏡をかけて、大きい文字なら本も読め、目の前の人の顔は識別できるようになっていましたが、歩行がやや困難のようでした。

昭和六十二年一月光明寺で「五重相伝会」が行われることになりました。先生は病氣をおして、最後の五重を光明寺で勤めたいとの強いご決意であつたそうです。私も養蓮寺檀徒として、妻とともに参加させていただき、藤吉先生を法灯師勸誡師とする五日間の行を受けました。先生の勸誡は四日間、午前午後と続けられました。法然上人のご法語に「念仏にいさみある人は、無辺の悟を開くべき人なり」との条があることを話されたのですが、世話係りのお坊さんの一人が休憩時間に「御前様はあのようにおっしゃいますが、皆さんは悟りを開くなんて考えなくていいんですよ」と助言されました。それだと自力念仏になつてしまうと気にされたのでしよう。

先生は五重の途中から健康状態が悪化したのをおして勤められ、最終日には密室道場で百人余の参加者の一人々の手を握って相伝の契りをされ、本堂前で記念写真撮影を済ませ、開山堂での成満会祝膳の途中から自動車入院されました。幸いに先生は回復され、平成二年九月には五重同行会（おさらい会）をお勧めくださいました。また、平成元年、二年、三年と、かつて継志学寮と一緒に暮らした仲間が光明寺に集り物故者の追悼や歓談の機会を得ました。九州や四国から駆けつけた人もあり、先生は大変喜ばれました。その三回目にと、一枚起請文のなかの「この外に奥深きことを存せば、一尊のあはれみにはづれ、本願にもれ候べし」の主語は誰なのかの問題について、哲学科出身のT君が、「法然上人と一般の人の双方でしょう」といいました。先生は「それはそうだなあ」と賛成されました。先生は五重の勸誡では「法然上人ご自身をさす」と言っておられましたし、平成元年

の四月から翌年三月までNHKラジオの宗教の時間に放送された「法然法語を読む」のなかでもそのように説明されていたのですが、あっさり改説されたので丁君も驚いていました。先生は本当に素直な方でした。

平成五年二月二十八日先生遷化の報に接し翌二月一日のお通夜にかけつけました。その前年の四月に光明寺で先生の喜寿の祝賀会があったばかりでしたし、光明寺の開山良忠上人は八十九歳で滅せられたのだから、自分なんかまだ相当長く生きなくてはと言っていたのに残念なことでした。先生と五十一年目のお別れでした。

先の五重相伝会で教導師を勤められた松島定宣上人は養蓮寺で毎月一回法話会を行われますので、私どもは夫婦で聴聞に参っておりますが、お寺の書院で心洗われる一時を送れることは幸せです。藤吉先生は勧誡の中で、聴聞が大事、法を聴け、鶯は啼く、「古松談般若、靈鳥弄真如」というお話をされました。宗教というものは私どもの日常生活と別のものであってはならない、念仏だけ申していれば極楽に生れると思っていはいけない、宗教とは日常の生活のあり方を教えるものである。地獄極楽というも方便、實際は生きている中にいかに正しく幸福な生活を送れるかが「本当の自己にめざめる」ことである、と私は本年三月、大学を退き弁護士になりましたが、藤吉先生のお手引きにより法然上人の法灯の末に連なる者として正しく生きるつもりです。

あみだぶと心は西に空蟬（うつせみ）のもぬけはてたる声を涼しき（法然上人）

（弁護士）

教育の現場から

最終回

学ぶ目標・学ぶ方法を

自分で見つけ、

勉強を楽しむ子どもに育てたい

―「面白い算数の学習」を開発して―

ゆうび小さな学園 代表
大妻女子大学大学院非常勤講師

内堀照夫

楽

「グルメの宿泊・流しそうめん」

自分で作ったそばちょこで「どんどん流して!」



遠い昔の懐かしい記憶である。

小学校一年生の担任先生は、八の字の太い髭をはやした一見こわそうな、でも優しい眼差しの六十歳位のお腹の出たおじさんであった。この田中先生が

「8の数字は、こう書きます。袋が二つ出来たでしょう。上の袋には四つ、下の袋には四つ入っていて合わせて8なんです」と大きな絵文字にして教えて下さった。

あの頃、「下の袋を大きく書くと、上に三つ入って、下が五つになるのかな、もつと下の袋を大きくすると……」などとおもいめぐらしたものだ。思えば先生は「8の合成と分解」を楽しく覚えさせて下さった。

一、「エルマーは、足したり、引いたりして冒険したね」

かつて一年生と「足すってどんな時かな?」「引くってどんな時かな?」と、いわ

ゆる加法と減法の素地となる概念くだと概念づくりの学習を一月も続けたことがある。

算数の時間になると

「足し算、みーつけた人、発表して下さい」と問いかける。

子供達は、生活経験を見つめたり、物語の人物の行動を想起したり、大人に聞き取りをしたりして、「……貰った。拾った。見つけた。掘りだした。作った。盗んだ。敵をやっつけて捕まった」など二十数個もさがし出した。これらが全て「十（足す）」という記号に集約されることを知った子ども達は「足すってすごいパワーだ」と声をあげた。

そして「エルマーのぼうけん」のエルマーは、足したり引いたりしながら、冒険旅行をしたんだね」と一緒に学習した仲間にかか通じない表現を楽しむ。

後日談も面白い。

「昨日の夕食の後は大変な騒ぎでした。実は、食器洗いを手伝っていた上の杏子が、手を滑

らせて大きな皿を床に落として割ってしまいました。その時、私が「あらまあ、派手に増やしてくれたわね」とおどけてみせましたら、どうでしょう。雅夫が聞きつけて「それは、増えたのではない。足し算にはならない。壊れたのだから引算の仲間だ」と私の前に立って主張します。それで終わればいいものを私も調子に乗って「だって、ほら増えているでしょ。いち、に、さん、し、……」とかけらを数えながら拾ってみました。すると「それは、かけらで、かけらは増えているけれど、お皿は壊れて一つ減ったの。だから引く一になるの」と理屈を立てて譲りません。（中略）一年生でも足し算や引算の考え方が日常の生活の仲間に入ってくる学習の仕方があるのだと雅夫の発言を通して分かりました。学校での楽しそうな、それについて本当の算数という感じの「算数の時間」を思い浮かべることができました（略）」という手紙を届けてくれた母親がいます。

楽

二、数字と応えに捕われすぎる

「亀が七匹、池の中に入ったり、石の上になつたりして遊んでいます。今、池の中に何匹、石の上に何匹いるでしょうか」

こんな文章題を提示したときの子ども達の表情を見たり、つぶやきを聴いたりするのが大好きである。

「なに？ これ！」

「変な問題だ。分かっていること（条件）が足りないよ」

「こんな問題出来ない！」

ついには、

「先生、この問題は変です」と大きな声で抗議する子も現れる。

「変な問題ではありません。工夫して解いてみて下さい」と指示すると、

「えー、これを解くの」と考え込む。やがて

「二箇所だから、二で割ればいいんだ。七÷

二＝三・五か。三匹と半分？ 変だな」

「今は暑い時だから、池の中にいる方が多いんじゃない。池の中七匹、石の上〇匹」

「石の上で申羅干しをする亀だっていると思うワ」にとぎやかになる。

子ども達は、年齢相応に、それまでの生活・学習経験を想起して面白い反応を示すが、いずれも「解答は一つ・数字で答える」という意識に縛られている。

こちらとしては、関数的な考え方が育つことを期待しているのだが。例えば「もし池の中に一匹いるとすれば石の上には六匹、池の中に二匹いるとすれば、石の上には五匹……と、数字を動的にみる能力を伸ばしたい。数字を生きているもの、変化するものとして捉えられたら事実・事象を読み取る力になる。」

そして、池の中の亀を「a」とし、石の上の亀を「b」として、 $7 \parallel a + b$ と抽象化することが出来たらと思うのである。

「父の体重は、花子の体重の何倍あるでし

「サッカーの宿泊」柏レイソルの練習を見学して、カレカ選手と



「ようか」の問題に「出来ない。だって、数字が無いもの!」と反応するのも『解答は一つ・数字で答える』に捕われていることの表れである。問題と出会ったとき「足の、引

くの、掛けるの、割るの」と質問するのも文中の数字に目を奪われそれに惑わされて、文脈で関わりを捉えない証しである。

幼稚園の頃から数字にばかり着目させて「百まで数えられる。引算が出来る。かけ算の九九も唱えられる」などに傾注し、算数の核ともいえる「分類整理し、一般化し、抽象化し、思考に論理を与える」数学的な見方・考え方を見落しているのではないか。

三、「淋しそうな数字はどちらかな?」

「二三と二四と、どちらが淋しそうな数字かな。君はこの二つの数字のどちらが好きになれそうですか」

時には、こんな「算数の時間」もいいのではないか。子ども達はしばらくは戸惑いをみせるだろう。が、そのうちに

「二四は、一日の時間だから好き」

「わたしは、二三。だってにいきん(兄さ

楽



「登校拒否児を支援する会」
真剣に話し合う親たち



ん) 欲しいからウツフ」と。

思いつきの発言も受け入れて、数字を親しみやすい身近な仲間にしていく。そして適当な契機を捉え、

「二三と二四と赤ちゃんが生れるとしたらどっちが多いか？」と問う。

楽しい問答を繰り広げ、やがて素数としての二三と、約数をたくさんもつ二四を捉えさせるのである。こんな工夫があると印象深く「赤ちゃん数」約数」が定着していく。

次も子ども達が激論を戦わせて熱中する手法である。

「正方形・菱形・長方形・平行四辺形・台形・不等辺四辺形があります。この中で一番簡単に描けるのはどれでしょうか」

四辺形の性質の学習に入る前に提示して、討論してから仮説を立てさせる。多くの子ども達が「正方形が簡単だ」と主張して譲らない。子ども達の心理としては、見慣れている物、整っている形に親しみを感じているので

はないか。それが即「描き易さ」に結び付いているように思われる。

それから、実際にストップウォッチを使ってタイムを測らせて実証させる。

四、二等辺三角形で円の面積を求める

「円の面積を求める公式は『半径×半径×三・一四』です。この公式を使っていろいろな円の面積についての問題を解いてみましょう」などと学習を展開しようものなら、すかさず「先生！ 三角形や平行四辺形の面積のときには、どうしてこのような公式が成立するかを説明してみよう、という『学習問題』をつくってやっていますから、円の場合もやりましょうよ」という主旨の発言があちらこちらからあって、これが共通の学習問題になってしまう。

それまで面積を求める公式が成立する理由を、独自の方法で証明して成就感を味っている

る子ども達は「円の面積を求める公式の成立を説明する仕方をたくさん探してみよう」の学習問題に取り組むのに自信と意欲をみなぎらせる。

子ども達は「我こそは」と、独自の発想で証明方法を編み出してくる。教夫は「三角形の面積が求められる人は「円」の面積が求められます。それは……」（別掲・教夫の発見参照）と自作のボードを見せながらショッキングにきりだした。この方法は、教科書にはまったく載せられていない。算数指導研究部に所属する教師までを「独創的な考えだ」と驚かせる。

日本の子ども達の計算技能はこのところ国際比較を見てもトップを走っているが、論理的に思考したり、独自の発想で解決したり、事実・事象を数学的に追及したりする力が育っていないとの厳しい評価がなされている。

これは、計算能力イコール算数の学力といった見方が横行しているためではないか。

楽

別掲 ・ 教夫の発見

三角形の面積を求めることが出来れば「円」の面積が求められる

円を、中心を通る直線で360に等分して、360の鋭角の扇形を作ります。(図1)
1つの扇形を鋭角の二等辺三角形とみなします。(図2)

すると、円は、正三百六十角形の正多角形ということになります。

この三角形の高さは、半径よりほんの少し短いだけだから、半径と等しいことにします。
底辺の長さも、

直径 $\times 3.14$ (円周) $\div 360$ でほぼ求められます。(図3)

これで次のようにして二等辺三角形の面積が出せます。

三角形の面積 $=$ (底辺) $\times$ (高さ) $\div 2$ です
から 直径 $\times 3.14 \div 360 \times$ 半径 $\div 2$
この答に360を掛ければ円の面積がでます。

1つの式に整理してみますと

直径 $\times 3.14 \div 360 \times$ 半径 $\div 2 \times 360$
です。

この式を整理していくと $\div 360 \times 360$
が消えて、

直径 $\times 3.14 \times$ 半径 $\div 2$ となり、これを、
直径 $\div 2 \times$ 半径 $\times 3.14$ と入れ換えます。

直径 $\div 2 =$ 半径だから、

円の面積を求める公式 $=$ 半径 $\times$ 半径 $\times 3.14$
と同じになります。

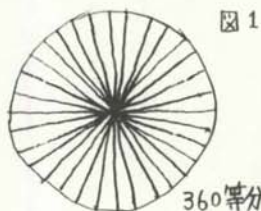


図1

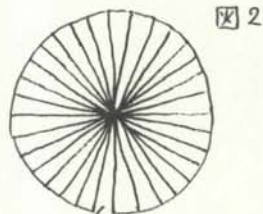


図2

1つの扇形は
二等辺三角形

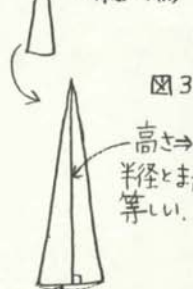


図3

底辺 $\Rightarrow$ 直径 $\times 3.14 \div 360$

五、学習問題を自分でつくる子どもに

子どもの性格を、学習に取り組む姿勢で分類してみると、「自主学習志向の子ども」と、「課題学習志向の子ども」の二つのタイプが見られる。

好奇心が旺盛で、驚きをもって事実・事象に接し、自らの疑問を持ち知りたがり、学習問題を自分でつくり、独自にそれを追及して解決へ努力を惜しまない、前述の教夫タイプの性行が前者である。

この両者は「性格・性行」であって、その価値を比較できるものではなく、二つの性行が共に強いほど理想的といえよう。しかし、日本の社会の多くの企業や組織体では、とかく後者の傾向が強い人材を求めているといえよう。また、学校教育でも、後者のタイプが指導しやすく「真面目に学ぶ子」として優位にあったのも事実であり、現在でもそうした

傾向は続いている。

しかし、二十一世紀を生きる人間は後者だけの資質を備えているだけでは充分とはいえない。文部省が指導要領で「新しい学力観」として打出している「自ら学ぶ意欲や、思考力・判断力・表現力などの能力の育成」「社会の変化に主体的に対応していく能力の育成」など、自主学習志向にウエイトを置く必要がある。

算数は、「計算練習」にその典型が現れているように、教科の性格・備えている条件から、学習問題を持つ子ども達に主体的に捉えさせることが困難な教科とされている。だからこそ子ども達が「自主的に楽しく学べる学習」を開発する努力が続けられなければならない。

親もまた、子どもが算数に興味・関心を持ち「面白い教科＝算数・楽しい教科＝算数」と感じ取れるような日常の話題・対応を工夫していきたくものである。

他人を許す…。なんと難しいことでしょう。反対に他人を責めることのなんとたやすいことか…。

人間には誰でも生まれながらにして持っているもの、煩惱があります。そのうちの一つがいかり（願恵）です。私たちは何かにつけてこの怒りの心を抱くものです。なかんずく、他人が何か過ちをしたときには多かれ少なかれ必ず顔を出す感情です。その人に対して過ちを責める言葉を語り、腹を立て、なにかしか償いをさせようと、そのことによって自分の正当性をより強く主張しようとし、人間は過ちを犯すことを繰り返して生きています。もっとも同じ過ちは二度とすべきでは

若和尚の

チ ヨ ツ ト い い は な し 其 四

ないのですが…。今日一日を振り返ってみましょう。とんでもないことはそうそうするものではないかもしれませんが、些細な過ちは多かれ少なかれしてはいませんか。誰でもそうなのです。他人の些細な過ちをいつまでも気にかけてジクジクと責め立てること、怒りが怒りを呼び込んで自分自身をも歪めてしまうことになりかねません。冒頭に、責めることはたやすく許すことは大変難しいと申しましたが、たとえ難しくともつとめて責めないようにすることが大切なのではないでしょうか。

責めるばかりでは何の進展もありません。むしろ、もっと大きな立場から、相手を包み込む

よう気づかい、自分とともに成長することを心掛けた方がはるかにいいでしょうし、その過ちを互いに無駄にしないことになるはずで

ます。最後に次の文を引用しておき

人の小過を責めず、人の陰私を発（あば）かず、人の旧惡を念わず。三者は以て徳を養うべく、亦以て害を遠ざくべし。（他人の些細な過ちを責め立てたり、内密にしていることをひけらかしたり、過去の過ちを覚えていないようにする。この三つを実行することとは自分の徳を養うことになり、人から恨まれるということもない）（中国・明時代 洪自誠述「菜根譚」）（正）

楽屋ゆかた



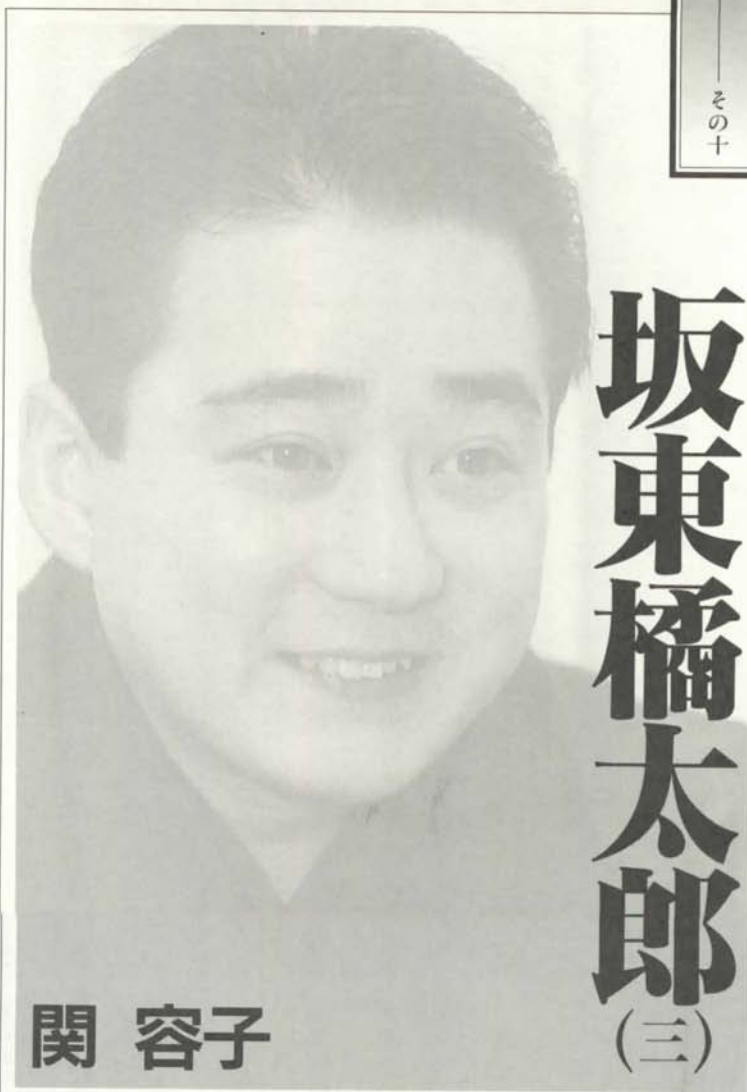
その十

連載

坂東橘太郎

(三)

この項最終回



関 容子

前に幸右衛門と行った新橋の蕎麦屋に、今度は橘太郎と行った。やはり橘太郎の蕎麦の食べ方も小気味がよくていい。幸右衛門のときに直侍の呼吸、と書いたもので、また同じたとえ方をするわけにはいかない。しばらく睥めてから、そういう、食べ方は、誰かに教わったの？ と訊いてみる。

「八重之助さんに教わりました。『髮結新三』の大詰、間魔堂橋まんどらばしの場に按摩が出るじゃないですか。あれはもりじゃなくてかけてすけど、八重之助さんが『お前、バツと食ったらしゃべれねえだろ？ 三本ずつぐらいが一番いいよ』って。蕎麦を食べながら按摩と蕎麦屋のやりとりがありますからね」

橘太郎はせいろから蕎麦を四、五本くらい著で上げ、蕎麦猪口に半分ほど浸して勢いよくスーッと吸い上げる。蕎麦がたちまち消えてゆくところが粋。

そう言えば、『め組の喧嘩』の序幕第二場のハツ山下の場で、め組の辰五郎が角力取りの四

ツ車大八を闇討ちしよう待ち伏せするのだが、ハツ山下には茶飯屋が出ていて、そこへ小按摩が通りかかり、茶飯を食べるところから始まる。二年前に私が見たとき、橘太郎が小按摩で、「茶めし、茶めし……旨いんだな、これが！」とやって大受けだった。もちろんこれはビールのコマーシャルのもじり。

「あ、あれは一番受けた日です。毎日いろいろ違いのをやってましたから。初日、茶飯を食べ終わって、小唄を歌いながら上手かみてへ引っこんでくるとそこへ出待ちしている辰五郎役の菊五郎さんが『お前、つまんねえよ、歌舞伎っぽくてもつと今っぽくやってくれよ』って、それで日替りで考えて出ました。『東京ブキ』のパロディで『茶飯ブギウギ』なんて歌いながら引っこんだり。茶飯屋の親爺役は菊十郎さんでしたが、『毎日おかしな唄ア聞かされて、こつちまでおかしくならア』とアドリブではやいてましたっけ」

ここで話題を変えて、前々から知リたかった



平成5年正月、歌舞伎会の「紅葉狩り」で山神を演ずる橋太郎

名題試験の話をくわしく聞いてみた。橘太郎は去年の一月、試験に合格し、今年一月名題昇進披露をしている。

「受ける資格は俳優協会に入つて十年以上というのが一応の規定です。ぼくはとくに十年以上たつてますが、師匠（羽左衛門）が『おれがいいって言えば、多分受かると思うから』つておっしゃるんで、ずうーつと待つてたけど言つてくださらなかつた。それで（尾上）松太郎さんの方が国立（劇場）の養成課の立回りの講師をなさつて、ぼくがときどき代わりをするところがあるんですが、やつぱり（名題）適任証持つてないと生徒を預けにくいとかで、そろそろ受けさしてやつてくださいよ、つて師匠に。『おれは別に受けちゃいけないとは言つてないが、お前受けるか？』有難うございます、つて即座に返事をして」

試験は松竹本社七階の稽古場で行なわれた。広い畳敷きの部屋に、寺子屋のような坐り机を並べてまず筆記試験。受験したのは十八人だつ

た。

「三時から筆記で四時半くらいから口頭試問と実技です。筆記の問題は『忠臣蔵』からよく出ますけど、この成績はあんまり関係ないみたいです。筆記で落ちる者はいないみたいですから。いつか猿蓑（さるもゝ）『対面』の朝比奈の用いる限取（かぎとり）を考案したのは誰か、という問題が出て、孝夫さんが『えー？ そんなん知らんなア、知つてたからつてどうなんや』つておっしゃつたとか（笑）。それで、実技の試験は、まず坊ちゃん方の『対面』で、染五郎さんが工藤、玉太郎さんが十郎、進之介さんが五郎。われわれはぼくが子梶原（梶原親子の平次景高役）あとは（並び）大名でした。坊ちゃん方の試験はそれで終り。それからぼくたちで立役と女方が組んで『忠臣蔵』七段目の平右衛門とおかです。組合せは試験のひと月くらい前にくじで決めます。とにかく試験場（松竹稽古場）の障子をあけて入ると、大幹部さんがスラリといらしして、そこでいきなりおかると平右衛門のさわりから



色白の橋太郎は顔をねずみ色に塗って『鳥羽絵』の鼠役を演じた。右は松緑（昭和56年2月）

始めるんですから、もう上がりっぱなしでして」

去年一月の末は歌右衛門、梅幸、羽左衛門が揃って病気で、審査に出られなかったというが、それでも雀右衛門、鴈治郎、芝翫、又五郎、富士郎、菊五郎、幸四郎、吉右衛門、梅玉、我当三津五郎、田之助、権十郎、彦三郎、といった顔ぶれが審査員だった。

「おかるが勘平の切腹を平右衛門から知らされて、『兄さん、どうしょ』『もつともだ……話せば長えことながら』から、水飲まして『おかるやーい』『兄さんさらばでござんす』『うん、いい覚悟だ』すると由良之助が『やれ待て兩人』と出る。そこまでが試験です。ほくは平右衛門を若旦那の彦三郎さんに教えてもらいました。審査員には教えてもらっちゃいけないことになつてゐるんで、師匠に教わらずに若旦那に教わったんですが、結局師匠の代りで若旦那が審査員でしたけど」

結果は半年後に発表されるが、だいたいその

晩のうちに師匠のところに内定の知らせが行く。十八人中合格したのが九人。かなりきびしい。名題下の立役で受かったのは橘太郎一人だけだった。『満果で受かったのは染五郎さんとお前だけだそうだが、よかったなあ』と、師匠がとっても喜んでくださいました」

染五郎が去年まで名題でなかったなんて知らなかった。それにしても橘太郎がこんな好成績で合格したのは、もちろん日頃の精進の成果だが、もう一つ面白い理由がある。それはこれまで何回も名題試験の手助けをして、試験場の雰囲気相場に慣れしっていたからだ。

「問題に『先代萩』床下が出て、鼠を頼まれたことがあるんです。中村屋（勘三郎）さんとの勘之丞（当時仲助）さんたちが受けたときでした。みんなコチコチになつて（荒獅子）男之助で、力が入りすぎて思い切り（鼠を）踏むやつもいるんです。踏まれながら、いてえなのやろ（笑）、こいつは落ちるな、つて下から審査して、みんな当りました。勘之丞さんは、

合格です。松緑旦那があとで、『おれはお前の鼠に祟やるよ』っておっしゃってください、それが何より嬉しかったです。だってばくは松緑旦那の鼠なんですから」

橘太郎は、松緑が元気でピチピチした踊りを見せていたころ、『鳥羽絵』の下男升六ますろくからむ鼠の役で何度も出ているのだ。鼠は縫いぐるみを着て頭には被り物があるので正面を向いて踊ると鼠の顔が上に行く。いつもあごを引いて踊ることを、鏡を見ながら稽古したそうだ。

「幕切れに、床下の男之助と鼠が逆転した形で、旦那を踏んまえて鼠が見得をするんですけどまさか旦那をほんとうに踏めないし、足を浮かしてるとふらついてまた叱られるし……でもすぐ気がいい役でした。長いシツポを手拭い代わりにしてクドキなんか踊ると、『御兩人！』って声が掛かったりして、すると旦那が、『何でおれと鼠が御兩人だ』って怒る（笑）」

本当に松緑の『鳥羽絵』はよかった。橘太郎の鼠も、ちゃんと踊りの相手役として筋書に名

が載っていた。芝居に出てくる鼠（床下）や犬（高時）や、猿（忠臣蔵 五段目）をつとめる役者の名は載らないが、踊りだと『座頭』の犬も『浮世風呂』のなめくじも配役表に載る。『鳥羽絵』の配役に、升六、松緑、鼠、うさぎ（橘太郎の前名）とあって、何となくおかしかったのを憶えている。

「鼠が後ろ向きに逆転宙返りなんかして決まったところで、『うさぎー』と声が掛かったら、前のほうのお客さんが怪訝な顔をして『うさぎ？ 鼠じゃないんですか？ あれ』なんて隣りに訊いてるのが聞えて（笑）、あやうく吹きそうになりました。旦那もあとで大笑いして」

橘太郎はとりわけ色白な子だった（今もそうだが）ので、鼠に入るときは被り物の首の部分にあるのぞき穴の薄い紗の布から、中の白い顔が透けないように、顔を鼠色に塗って出た。煙突掃除の少年みたいによこれた顔のうさぎの肩を、上機嫌で抱き寄せる松緑との記念写真は、今では橘太郎の宝ものだ。



ところで、橘太郎がまた受賞する。また、というのは松尾芸能賞や真山青果賞や松竹会長賞など受賞続きだから。

今度は今年から制定された、俳優祭で俳優協会から脇役さんたちに贈る賞の、大賞が幸右衛門と菊十郎、奨励賞が十蔵と橘太郎に決まったという。

さつそく三階の楽屋へおめでどうを言いに行く。橘太郎は大部屋を出て、幸右衛門や菊十郎たちと一緒に名題部屋にちゃんとした。

「師匠に御報告したらニコニコして『くれるってもんは何でももらつときな』」

(エッセイスト)

前号39ページ上段後ろから6行目「お侍道様」は「お侍道様」の誤りでした。ここに誤正し、お詫言います。

念仏信仰の系譜

須藤隆仙

日本編

四

●法然上人の出現

いよいよ法然上人のご登場であります。

上人は恵心僧都没後百十六年たつた長承二年（一一三三）に生まれられました。この

前年に良忍上人が亡くなつておられます。ただしこの間にはまだまだ天台の方で念仏を弘められた方がおられたのです。例えば恵心僧都の弟子覚超師（九六〇—一〇三四）は

『往生極楽問答』を著わし、覚超の弟子勝範師（九六〇—一〇六七）は『西方集』を著わしています。この外にも学僧真源師（一一〇六—一一三六）が『順次往生講式』を世に問い、在家者でも宇治大納言源隆国（一一〇四—一一七七）が比叡山の坊さんと一緒に『安養集』を編集しております。これは、インド・中国・日本の浄土教典籍二百余巻を集めたもので、これによって西方願生の心を起こさせようとしたのでした。隆国はのちに出家しております。

こういった状況のなかに法然上人がでてこられるわけですが、法然上人もまたもと天台宗の僧であられました。

●上人のご伝記

法然上人のご伝記はたくさんございまして、今日ではそれを学問的にいろいろと研究した論文が多く出されております。そういったなかで、一般的に伝えられているものを見てみますと、例えば中村元先生監修『新・仏教辞典』に次のようにあります。

「美作（岡山県）の人。漆間時国の子。幼名は勢至丸。九歳、討たれた父の遺誠によつて出家、十五歳、比叡山に登つて皇円・叡空に師事し、一切経を閲すること五度、出離の道を得なかつたが、善導の観経疏によつて開眼し、源信の往生要集により新宗開立を決意した。東山吉水で浄土法門を樹て、念仏修行に専念した。朝廷・公卿をはじめ武士・庶民のあらゆる階層に帰依されて道俗による称名念仏の声があふれた。しかし旧仏教の反対が強く、たまたま鹿谷の念仏道場で女官の出家に発端して



南部北嶺の提訴によつて念仏停止となり、二僧は斬罪、源空（法然上人）は七十五歳で土佐（実は讃岐）に流され、同年許されて摂津（大阪府）勝尾寺に仮居すること四年、道俗を教化し、建暦二年（一二二二）正月二十五日、東山大谷で寂（八十歳）。

文中、「善導の観経疏によつて開眼し、源信の往生要集により新宗開立を決意した」とありますのは、至当の表現ではなく、このところは、「源信の往生要集にヒントを得て、善導の観経疏により新宗を開立した」ととてもすべきでしょう。

出家の動機については、最近、梅原猛氏が、討殺された父の遺誠によるものではなく、父が武士世界のトラブルから子（法然上人）を守るために寺に預け、その子は十五歳で正式に出家・受戒し、その後には父は敵に殺されたので子は遁世生活に入った、との見解を発表しております。（『中外日報』）

いまこれについて愚考を述べる時間をもちませんが、いずれにしても、法然上人出家の動機は、父の武士社会におけるトラブルがその原因であったことは間違いないようです。ところが、法然上人が後年、弟子 聖光上人に語ったと伝えられる言葉に、「世の人はみな因縁ありて道心^{どうしん}をばおこすなり。いわゆる父母兄弟に別れ、妻子朋友に離るるなどなり。しかるに源空は、させる因縁もなくして法爾法然と道心をおこす^{ほうに}が故に、師匠名を授けて法然と名付け給いしなり」とあるのであります（和語灯録・五）。また別に「亡父の遺言、耳の底にとどまりて、心のうちに忘れず」という言葉も伝えられているのであります（勅修御伝・二三）。これらはおそらく、父被害死の事実はあったのでありますが、法然上人はそれを「恨みごと」とはされなかったというのでありましょう。したがって、それが発心の動機だったなどとは仰せられなかったわけであります。「恨みごと」とされ



なかったのは、やはり父上の遺言によったものでありましょう。

広く常識的なことの辞書として名高い『広辞苑』には、上人を次のように至当に記述しております。

「浄土宗の開祖。諱は源空。美作の人。父の遺言で出家。比叡山に入り、皇円・叡空に師事。四三歳の時専修念仏に帰し、東山吉水で浄土法門を説く。また、大原で南都北嶺の僧徒と法門を論じた（大原問答）。貴賤の帰依者の増加に伴い、旧仏教の圧迫を受けて讃岐に流されたが、許されて四年後に帰路。」

●凡夫報土に生まれる

法然上人の教えは、まことに簡單明瞭であります。それは上人自ら、「われ浄土宗を立つる心は、凡夫の報土^{ほうど}に生まるることを示さん^んがためなり」（勅修御伝・六）と明言されておられるとおりであります。

私はこれまで、くどくどと、〃浄土教は凡夫を自覚する宗教である〃ということを述べさせて頂いてきたのであります。善導大師も法然上人も、この「人間は凡夫である」ということを最も強調されたのであります。そしてこの凡夫性の自覚ということは、仏教の一分流がそういうことをいつているのではなく、仏教の本流にそれがあるというのが愚見なのであります。そのことは釈尊の時代からすでにそうなのであります、インド編で述べさせて頂いたとおりであります。釈尊は苦行を捨てて、少女の捧げた牛乳粥ぎゅうにゅうでよみがえられたのであります。それは即ち、聖道を捨てて浄土（安樂）に帰した、ということの原形ではないでしょうか。私の出た函館中学の大先輩であられる故亀井勝一郎先生なども、そのような見方をしておられました（亀井『日本人の精神史』）。

いかなる高僧でも、この凡夫性ということ否定することはできないのであります。超



人的活動をされた弘法大師も「生まれ生まれ生まれ生まれて生の始めに暗く、死に死に死に死んで死の終わりに冥し」といわれ、禪の道元禪師も「仏々祖々、皆もと凡夫なり」といつておられる所以であります。

最近、仏教の名をかたて、超能力が得られる、仙人になれる、などと人を勧誘し、社会的な大問題を起こしている集団があるが、仏教は神仙の道などを教えるものではないのであります。凡夫の自覚を教えるものを仏教なのであります。

法然上人はまずこのことをしつかりと示され、そしてその凡夫が報土（最高の浄土）に生まれることが出来るのだ、と宣言されたのであります。それはこれまで、凡夫は価値の低い世界により生まれることが出来ないのだとの説が流行していたからであります。それを真つ向から正されたのであります。そのことは、中国の善導大師から証言を得たからであって、「もし天台によれば凡夫浄土に生ま

ることを許すに似たれども、浄を判ずることと浅し。もし法相によれば浄土を判ずること深しといえども、凡夫の往生を許さず。諸宗の所談、異なりといえども、すべて凡夫報土に生まるることを許さざる故に、善導の釈義によりて浄土宗を立つるときは、即ち凡夫報土に生まるることあらわるるなり」(勸宗御伝・六)と仰せられ、「偏に善導一師に依るなり」(選択集・一六)と明言されておられるわけであります。法然上人が善導大師にのみ依られたその内容を拝見しますと、上人の信仰真相がいつそうよく分かりますので、その点につき述べます。

●善導一師に依る

上人が「偏に善導一師に依る」といわれたその理由は、すでに右の『勸修御伝』の文で明らかになってありますが、『選択集』にはさらに、善導大師は浄土の教え(念仏信仰)を宗(一ばん尊い教え)とされたし、大



師は三昧発得のお方でもあられたから、このことを付加されているのであります。これです。そう偏依善導の意義が明瞭になるわけですが、三昧発得というのは、無心の境を得たということ、即ち仏様に近くなった状態をいうのであります。それだけではありません。『選択集』の末尾には、善導大師は弥陀の化身であられる、とまでいっておられるのであります。

それはどういふことかといいますと、善導大師こそ、仏様の立場から念仏のことを発言なされたお方なのだということであり、仏様の立場からの発言とは何かといいますと、仏様のみ心になつた行ないをして下さいよ、ということであり、仏様のみ心になつた行ないとは、純真な気持ちでいつでもお念仏を忘れずに申す、ということであり、そこを善導大師は、「一心に専ら弥陀の名号を念じて行住坐臥に、時節の久近を問はず。念念に捨てざる者、これを正定

の業と名づく。かの仏の願に順ずるが故に」
 (『観経疏・散善義』)とご教示なされたので
 ありました。意味は『行往坐臥一心に念仏を
 称え、時の長短と関係なくこれを相續するこ
 とこそ、往生の正しい行ないである。それが
 仏の真心にかなっているのだ』ということであ
 ります。「かの仏の願に順ずる」ということ
 は、即ち仏様の真心にかなうということであ
 りますが、そこが重大なところなのでありま
 す。法然上人は、これを求めて四十三歳まで
 の長い間、求法の修行をつづけられたのであ
 りました。その求法の苦悩と、発見の喜びと
 を、次のように告白しておられるのです。

「およそ仏教多しといえども、詮ずるところ
 戒・定・慧の三学をば過ぎず(中略)悲
 しきかな悲しきかな。いかげせん。いかげ
 せん。ここに我等如きは、すでに戒定慧の
 三学の器にあらず。この三学の外にわが
 心に相應する法門ありや。わが身にたえた
 る修行やあると、よろずの智者に求め、も



ろもろの学者に訪いに、教ゆる人もなく、
 示すにともがらもなし。しかる間、なげき
 なげき経蔵に入り、悲しみ悲しみ聖教に向
 いて、手ずから自らひらき見しに、善導和
 尚の観経疏の、一心に専ら弥陀の名号を念
 じ、行往坐臥に時節の久近を問はず。念
 念に捨てざる者、これを正定の業と名づく。

かの仏の願に順ずるが故に。という文を見
 得てのち、われらが如きの無智の身は、ひ
 とえにこの文を仰ぎもはらこの理をたのみ
 て、念念不捨の称名を修して決定往生の
 業因にそなうべし、ただ善導の遺教を信ず
 るのみにあらず、又あつく弥陀の弘願に順
 ぜり。順彼仏願故の文ふかくたましいに染
 み、心にとどめたるなり」(和語灯録・
 五)

戒・定・慧とは、戒律と、精神統一と、正
 しい智慧とでありまして、仏教は詮ずるとこ
 ろ、この三つに帰するのであり、それを三学
 というのです。どう考えてみても、私たち凡

夫は、このどれ一つとして満足にマスターすることはできません。そのような凡夫を救う法門はないのかと、上人は悲嘆に悲嘆を重ねて仏典を研究なされたのでありました。その結果、善導大師の右述のお言葉を発見なされ、震え上がるほどの感動を覚えて、これこそ万人救済の道であると感泣し、ここに善導大師の教えによる念仏を、一宗に開立しようとして決意されたのであります。時に承安五年（一一七五）春のことでありまして、これを以て浄土宗開宗の起源としますのであります。

● 仏様が選んでくれた念仏

右述のように、法然上人は、念仏が仏様のみ心になつた行ない、その悲願に順適した行ないである、という根拠を得て、浄土宗を開宗されたのであります。それは別な表現でいいますと、仏様から下賜された行ないの発見、ということでもあります。善導大師がそれを教えてくれたわけですが、他のそれ



までの在来宗派で説く念仏は、仏様からの下賜を念頭におかず、自分たちの方から選定するといった念仏なのであります。それはそれで意義のあることなのですが、それだけでは肝心の仏様の御意が分からないのです。そこに信心としては希薄性があります。ところが法然上人は、善導大師から教えられて、仏様の御意ということが分かった、即ち、念仏というものは、私たちが仏様へ上納するものではなく、仏様から私たちへ下賜されたものである。そういうことが分かったのであります。そこで法然上人は「選択」ということを仰せられた。念仏は仏様が私たちのために選択（えらびとり）して下された行ないである、とこういうわけであります。（つづく）

（函館・称名寺住職）

六月初旬の日曜日、好天に誘われ子供たちを連れて近くの海に行った。好天のせい、海が近づくにつれて渋滞となり、後部座席ではしゃぐ子供たちと渋滞とにイライラしながら、一時間近くを要して海に着いた。

どこまでも広がる青い空と海。砂浜に持参したゴザを敷き、波打ち際に走る子供たちを見ながら、やはり来てよかった、と思った。家でゴロゴロしていれば、世間でよく言われるように、妻から粗大ゴミのごとくに扱われ、「もっと子供の面倒をみてくたさい」などと叱責されているのだから、こうして、出かけてくれば、妻も喜び子供も喜び、そして自分も開放された気分になる。三方みなうまく納まるわけ

である。

ひとしきり子供たちと遊んだあと、まだ遊ぶという彼らを波打ち際に残して、ゴザの上に大の字になった。吸い込まれそうに澄んだ青空が顔の上いっぱいに広がっている。潮風を胸いっぱい吸い込み、ゆっくりと吐き出す。何度かしているうちに周囲の喧騒が消え、小さな私という存在が、大空を漂っているような気分になってきた。すると、ふと中原中也の詩の一節が浮かんだ。

「……ああ、おまえはいったい何をしてきたのだと ふきくる風が私に問う……」

振り返って見れば、若い頃、広がる将来にいろいろと夢みたものだった。しかし、夢ばかり

◆◆◆とてもかとてもこの身には◆◆◆

は見るが努力が伴わずどれもが実現しなかった。そして現在、そんな夢のあったことも忘れて日々忙殺されている。

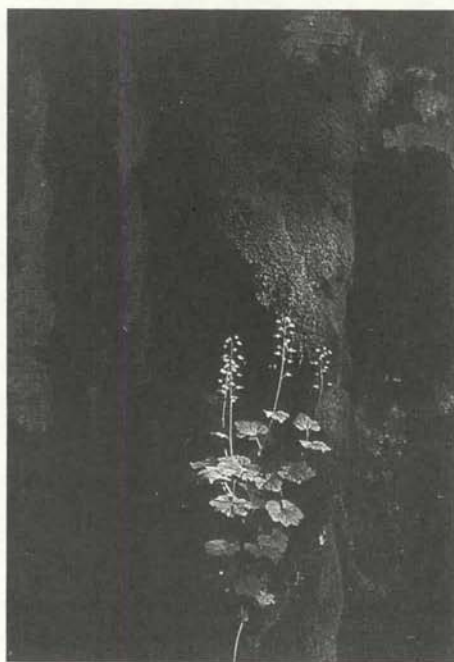
「生きるってどんなことなのだろう。そして幸せって？」

ふと呟いてみて、こんなことを考えたの何十年ぶりだろう、と失笑した。すでに阿弥陀様に身をまかせて二十年。「いけば念仏の功つもり、死なば浄土へ参りなん。とてもかとてもこの身には、思いわすろうことぞなき」なのである。そして、そこに一点の疑いもない。幸せそのものの現在である。と思ったとき、びしょ濡れになって、満足きつた子供たちの笑顔が、青空と私の間にふさがった。

(順)

表紙は語る
共に生きる
ブナ原生林から

●
本誌表紙写真／文
御所野洋幸





森は水を貯え、土壌を作る。

地球温暖化の原因になっている二酸化炭素を吸収し、鳥獣を育て、プランクトンや虫の育成まで行ない、結果的には魚類も保護している。

その森の働きの要、それがブナの原生林なのだ。

樹齢150年のブナ1本で、約8トンの水を貯え、ヘクタールあたり年間10トン近い葉を落とすという。

雨が地表を走ることを抑さえて洪水を防ぐブナ。森の母、森の医者と呼ばれるブナ。そのブナと共に生き、写真を撮り続けるひとりの写真家がいる。

(編集部)

あー、これが樹雨きさめか

今年は梅雨明けが遅くシトシトと降る雨が今日で四日も続いている。カッパを着込み林の中に入る。

ブナは幹も葉も水をいっぱい含み、木肌も柔らかく葉は厚くなり、表面は濃い緑で光り美しい、そして何層も積み重なった落葉のジ

ユータンは降り続く雨をいつまでも吸いとり喜んでゐるのかのように見える。

森の中では毎年たくさん葉が枝や樹皮、木の実などと共に地面に落ちる。落葉だけでも一ヘクタール当り約五トンぐらいだから、六畳の部屋の広さに三キログラム、体積にしてだいたい夏掛けの布団ぐらいの量になる。だから森の地面は毎年夏掛け布団一枚づつ重ねられてゐることになる。

その落葉は、まず最初に微生物であるカビやキノコの仲間が分解し軟らかくする。それを粉々にするのは土壤生物のミミズ、ヤスデ、ダンゴムシ、さらに甲虫の幼虫などである。微生物、土壤生物、小動物、鳥などの働き、すなわち、食物連鎖により養分循環が行われ有機物の多い土壤になる。そしてこの土は高性能浄水器となる。この天然の浄水器から湧き出た水を、ふきの葉のカップで飲む。私の幸せなひとときである。しかし私を悩ませるものもある。蜂である。眉毛のあたりを刺さ

れ顔が玉子のように膨れ、視界もきかず一日中寝ていたり、撮影中にアブの大量に取り囲まれたり、ヤブ蚊や強烈な臭いを出すカメ虫に悩まされたり、日中干していた寝袋に毛虫が入っていたらしく、身体中を毒針のタワシで叩いたように赤いブツブツが無数についていたり、二匹の蝮に氣を取られ沢で転び、びしょ濡れになるなどいろいろのことがある。

森の中では、都会の生活では味わえないすばらしい出会いがあるが、初期の頃は辛さ、不便さ、苦しみなどは喜びの何倍にも感じられる。個人差もあるが、山の生活に馴れ親しむにしたがつて、そのうちに苦しかったことや不便さなどはなんでもないことになる。

近くの白神山地が世界遺産に登録されてから、この奥森吉にも多くの人達が訪れるようになった。規模や知名度では白神山地に及ばないが、ブナの原生林と溪谷、清流の美しさ、湿地帯の水芭蕉、高山植物など、キャンプ場から一時間前後で目に出ることが出来る便利

さのためと思うが、訪れる人が多くなると目につくのがマナーの良くない人である。森や林の緑が好きで、どうしても想像すらできない悲しい出会いが多くなる。

七月十六日、五日ぶりに太陽が顔を出した。前日までの長雨で水分をたっぷり含んだブナは、夏の強い日差しを心地良そうに受けとめている。森はセミ達のコーラスの場となる。樹齢二百年程のブナの木の間から一メートルの所にコブが出来ていて、その回りはコケに被われ、そのコケの中から二十センチ程伸びた花がある。細い一本の茎に二、四ミリの小さい花をいっぱいつけた、ズダヤクシユだ。少しの風でもユラユラゆれているが、木洩れ日を浴びその姿をひき立てている。可憐な美しさにひきこまれカメラを向けた。

ズダヤクシユの撮影中に霧が出てきた。セミの鳴き声がとまった。無数の木々の葉と霧が音を吸収し、森に静寂をもたらす。緑の林は一変して幻想的になる。今度は林の中にカ

メラを向けシャッターを切る。レンズが曇る。レンズを拭きながらの撮影が続く。身体がシットリと湿りを感じる。しばらくするとパラパラと音がする。雨かなと思って上を見ると、霧の間から見える空は青空だ。まわりの木の葉を見ると、葉からあふれ出たように小さい水玉が葉の表面いっぱいについている。霧が樹木の枝や葉にまとわりついていたので、その一つ一つの水玉が柔らかな光を同じ所に写しかがやいている。一番大きいのがいまにも落ちそうに葉先にしがみついている。それを風の子供が木の葉をゆらしパラパラと水玉を落とす。あー、これが樹雨か、とカメラにビニール袋をかけ、倒木に腰を下ろし耳をかたむける。遠くの方でパラパラ、近くでもパラパラ、私の身体にもパラパラとリズムさえ感じられる心地よい音は五分間程続いた。霧が去り、セミのコーラスが林の中に広がり、夏の強い日差しが林にもどった。私の撮影も終わった。

舞 見 御 中 暑 平 成 七 年

総本山知恩院門跡第八十六世 浄土門主 中村康隆	大本山 増上寺 法主 藤堂恭俊	大本山 金戒光明寺 法主 坪井俊映	大本山 百万遍知恩寺 法主 大野忍敬
大本山 清浄華院 法主 江藤澄賢	大本山 善導寺 法主 藤堂俊章	大本山 光明寺 法主 戸松啓真	大本山 善光寺大本願 法主 一條智光
法然上人御降誕地廿五霊場第一番 中国三十三観音特別霊場 誕生寺 〒709-36 岡山県久米郡久米南町里方八〇八 電話(〇八六七)二八一二・二〇二	大正大学 理事長 大田秀三	埼玉工業大学 松川文豪	学校法人 大乘淑徳学園 淑徳大学・淑徳短期大学 理事長 長谷川良昭 〒174 東京都板橋区前野町五一五一二

舞 見 御 中 署 平 成 七 年

京都文教短期大学

学長 **大河内良孝**

〒611 宇治市慎島町千足八〇
電話(〇七七四)二一四一〇一

浄土宗宗務総長

成田有恒

〒154 世田谷区世田谷四一七一九
大吉祥寺

称名寺

〒984 函館市船見町十八一十四
電話(〇一三八二三三)〇五七四

愚純院

住職 **中村真道**

〒984 仙台市若林区新寺三十二一七
電話(〇一二二)一五六一六〇五七

雲上寺住職

東海林良雲

〒985 塩釜市南町十一一

寺は生きているうちに行くところ 西光寺

住職 **樋口隆信**

〒986 石巻市門脇町二一五一七
電話(〇二二五)二二一二六四
FAX(〇二二五)九六一九〇九五

〒365 鴻巣市本町八一三十一

勝願寺

電話(〇四八五)四一〇二二七
藤田得三

大松寺

酒井亮貫

〒108 東京都港区三田四一一三八
電話(〇三三四五)一二四九四

芝学園(芝中・高校)

理事長 **真野龍海**

天光院〇三一二三四三一―一三二八
FAX〇三一二三四三四一〇五六四

浄土宗東京教区教区長
光取寺

住職 **大室了皓**

〒141 東京都品川区上大崎一五一十
電話(〇三三四四二)一八三八四

西念寺

住職 **西島義彦**

〒160 新宿区若葉二一九
電話三三五一一〇六六二

浄土宗梅窓院

代表役員 **中島真成**

〒107 東京都港区南青山二一六一三八
電話(〇三三四四四)一八四四七
FAX〇三三四四四一八一〇七

舞見御中 暑 平成七年

〒112 東京都文京区小石川三丁目十四番六号 無量山 傳通院 電話(〇三)三八一四一三七〇(代表) 振替東京六〇九三番	光円寺住職 佐藤良純 〒112 文京区小石川四丁目十二一八 お寺は皆さんの相談所 浄心寺	〒113 文京区向丘二丁目十七一四 小池政雄 法性寺 長臘 広本徹隆 〒135 江東区三好一丁目一八 電話 三六四一―一三五六
明顕山 祐天寺 住職 本多正雄 副住職 巖谷勝正 〒153 東京都目黒区中目黒五丁目四一五三 電話(〇三)三七二二一〇八一九	教安寺 住職 野呂幸進 〒210 川崎市小川町六一二 横浜大光院 宮林昭彦	鎌倉大仏殿 高德院 住職 佐藤密雄 〒248 鎌倉市長谷四丁目二一八 電話(〇四六七)二二一〇七〇三 FAX(〇四六七)二二一五〇三一
浄土宗 正観寺 住職 宮沢善弘 横須賀市浦郷町二一七九 晴雲寺住職 塚田弘導 〒254 平塚市立野町六一五 電話 〇四六三(三二)一一六三八	貞松院住職 山田和雄 〒392 諏訪市諏訪二丁目十六二二 お骨佛の寺 一心寺 貫首 高口恭行 〒543 大阪市天王寺区逢阪二丁目一八一六九 電話(〇六)七七一一〇四四四代	



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

乱世に道を拓く人

西行、文覚、慈円そして法然

多岐祐介

このところ、目方が百キロほどある。十分の一トンだ。あれこれの体調不良を医者に訴えても、まず体重を落とさねばなにことも始まらぬと、いつこうに取りあつてくれない。そんなであつても、やはり自分は痩せているんだなあと、痛感させられることがしばしばある。

西行は太っていたか痩せていたか。確たる文献資料はないようだ。ただたいそう頑丈な人だったことは、まちがいない。正保年間に出了た『西行物語』という読物があつて、多分に美化された歌聖西行の姿が、江戸期庶民に流布していたことが知れる。また芭蕉が、画の雪舟や茶の利休などと並べて、「西行が和歌における」生きようを我が手本と仰いでいたことも有名だ。当時の情報量のしからしむるところだが、これも芭蕉流に切りとつた西行像といえる。つまりは中世から近世にかけて、都合よく美化され切り縮められた風流人

西行が、ひろく人口に膾炙^{かいしや}していたわけだ。

実証主義を旗印とする近代の西行研究は、あちこちの文献の切れつばしを博搜してつなぎ合わせ、想像力たくましく状況証拠をとりそろえて、伝説化される前の、いわば素顔の西行を突きとめようとしてきた。伝説をはぎとつてみたら案外つまらぬ顔だったという場合もよくあるが、西行の顔は近代学による探索の結果、ますます面白くなつてきている。

西行六十九歳のとき、旅の道すがら鎌倉の鶴ヶ岡八幡宮にたち寄ると、源頼朝とばつたり行き会わせた。まだ幕府開設前の、若き頼朝である。歌う坊さんとして名の売れていた西行と出会った嬉しさに、頼朝は一夕西行を招き、和歌のコツなど教えてくれと所望した。と、老西行は相手をキツと睨んだ（かどうかは知らないが）かと思うと、

「今のお前さんには歌なんぞより兵法が大事だろう」

と、剣術軍略の講義を始めた。その内容すこぶる充実していることに聡明な頼朝はすぐさま気づき、ノートをとったという。『吾妻鏡』という史書に書いてある。

またこちらは伝説化された逸話。荒法師の異名をとる剛胆な高僧に、文覚上人という人があつた。西行の噂を耳にするにつけ、日頃弟子たちの前で、坊主のくせに軟弱にも歌の道などどけしからん、もし眼の前に現れたらブツとばしてくれよう、と息巻いていた。とある日、旅中の西行が一夜の宿を借りにたち寄つた。さあ弟子たちは気が気ではない。今宵は血の雨が降るやもしれぬと、一睡もできぬありさま。が、なにごともなく一夜が明け、翌朝文覚は丁重に西行を送り出した。臍に落ちないのは弟子たちだ。お前が訊けよ、お前こそ、と互いに肘を突つきあつたあげく、

「あのー、先生、どういうわけで……」

と一人のオッチョコチョイが切りだした。

「ばかものつ」と雷鳴のごとき文覚の一喝。

「あれがこの文覚にブツとはされるツラか。

うっかりするとこつちがブツとばされるわい」とのことだったとき。頼朝にまつわる史実といい、文覚にまつわる伝承といい、どうも風流西行では納まらぬようだ。いったいどんな面がまえの男だったのだろうか。

出家前の西行は佐藤義清のりきよといって、姓から判るように藤原家の流れをくみ、鳥羽院の北面武士だった。同じく北面武士だった平清盛とは同齡で、幼少より互いに知る間柄である。ときの左大臣頼長は、保元の乱の一方の大立物で悪左府などとあだ名された人だが、じつは当代きつての大秀才で、その日記によれば、佐藤義清は兵法射御をよくし、仏法歌道に熱心な、頼長の眼をも惹く若者だったという。兵法というから剣術、射御というから弓と馬、仏法というから学問、歌道というから芸術だ。別の資料によれば、なんと蹴鞠けまりも達者だった

らしい。つまりは優等生でスポーツ万能、おまけに図工音楽家庭科まで、なんでもござれのスーパーボーイだった。だのに頼長の日記によれば、義清は二十三歳のとき、泣きすぎる妻と娘を振り切つて、謎の出家をしてしまう。多くの国文学者が出家の動機を嘆き回り、テレビの芸能レポーターよろしく、鬼の首をとつたかの説を出しているが、いずれそれらしくもあり、それらしくもない。

彼は自分の優等生らしさを克服したかったのではないか、と想像してみる。非凡な集中力でなんにでも挑戦し、人並以上にできるようになってしまふ義清に、ないものがたつたひとつあった。武門の棟梁として一族郎党を統べる器量だ。義清より不器用な朴念仁に見えても、清盛にはこの一点があった。しかも当時日の出の勢いの源平両氏に対しては、名門の誇り高い佐藤家も風下に立つほかなく、義清がいくら真面目に勤めあげたところで、

同齡の清盛の上に行くことはかなわなかった。突きつめて考えねば済まぬ氣性の義清は、どうしても自分流の道を切り拓かねばならなかったのだろう。

西行の少し後に鴨長明が、しばらく後に兼好が出て、結果からみれば西行は中世文芸の開祖のようになった。だが高村光太郎の詩ではないが、西行の前に道はなかった。彼の歩いた跡に道ができたのである。道なき藪を全身でこぎ分け、古代人の足腰をもって歩いた。中世的諦観とも近世的風流とも、あまり縁がなかったと考えていい。

かつて法隆寺の壁画が焼けたとき、どう修復すべきか論争になったことがある。長い年月のあいだに褪色して古色を帯びた、焼ける直前の姿の模写がいいか、技法や顔料の最新研究を駆使して、古代貴族が好んだままの復元がいいかという問題だった。結局は模写案が採用され、復元案は捨てられた。ばくらは

いとも無反省に、古刹や文化財を「渋い」などといってありがたがり、たとえば平安神宮の派手さを「俗悪」などという。しかし古代人が愛したのは丹塗り柱に青瓦、ご本尊には金箔をほどこした、強烈な色彩だった。それを俗悪とかたづけて平気でいられるのは、こちらの感性が瘦せてしまっているからにほかならない。強烈な色彩を求めずにいられなかった古代人のエネルギーを想像することなしに、古典を読むことはできない。

法然上人という怪僧が巷でもてはやされるのも末法の世なるがゆえ、との嘆きが『愚管抄』という史書に見える。筆者慈円は関白の弟にして天台座主に何度も返り咲く、最高知識人で大歌人。だが権力中枢にあつた人だけに新時代の胎動には理解が及ばなかったとして、鎮護国家の旧仏教と民衆済度の新仏教とが擦れ違つた過渡期の構図として、引用されることもある。なるほどそうに違いあるまい。

だが同時に、はた眼には不可解とも無気味とも映るほどに、むくつけきエネルギーをもつていた人として法然上人を思い浮かべるのでなければ、ぼくには面白くない。それでこそ乱世に道を拓く人であり、歩んだ跡が道になった人ではないか。西行を風流な歌聖とし、平安神宮を俗悪と切り捨てて疑わぬような、後世の瘦せ細った美意識で、宗祖を切り縮める愚は慎まねばならない。

とはいえここだけの話、どう視ても平安神宮は閉口だ。ということは、ほうら、やはりぼくは瘦せている。

たきゆうすけ

文芸評論家

一九四九年新潟県生まれ

早稲田大学第一文学部卒

現在、図書新聞、西日本新聞、

北海道新聞、新潟日報等に執筆連載中

著者「批評果つる地平」(旺史社刊)

夏

誌 上 投 句

揚羽蝶岩を抱えて憩いおり

箱根路の燃える若葉の生命^{いのち}みて

児玉良男（静岡）

大屋根の反りすれすれに夏燕

合歓の花和ろうそく練る指太き

吉田ゆきゑ（東京）

明け早し仏陀のこゑを空に聴く

しばらくは流れにおけり 鮎

児玉仁良（埼玉）

百合の香が頭痛に重き般若経

64

蕉翁ゆかりの地、深川に仏縁をもって、句友、俳友十六名が集う！
かつて本誌五月号で紹介した二つの句会が合同拡大して六月大安
の土曜日、句会を開催した。思い思いに清澄庭園、深川神明宮資料
館等を午前中、吟行。午後一時、芭蕉稲荷に集結し、句会は始まった。

浄土宗貞源寺（住職 藤木芳清）・西念寺（住職 佐山昭順）合同句会
刻 六月吉日 壬申

処 深川万年橋秋 芭蕉記念館分館

兼題 隅田川（大川）、水羊羹

他三句

参加者

石田良吉 黒川清虚 前澤智恵 若月賢治 宮尾洋一 藤木芳清
大山夏子 若泉真樹 笠井亞子 斉田仁 大畑等 長谷川 裕
近藤十四郎 近藤あずさ 森田博子 佐山哲郎

水羊羹食いて宗教書の目次 等

水羊羹切り分け言葉探している 真樹

水羊羹沖積世の地球がある

仁

切り口の折目正しく水羊羹

芳清

水羊羹喉を素通りする言葉

夏子

水羊羹夜にナイフをつき立てる

裕

我に似た水羊羹の味気なさ

博子

ふるぶると口に運びし水羊羹

清虚

水羊羹浴衣の色香そつと乗せ

賢治

ほどほどの水羊羹の憩いかな

智恵

手を叩き水羊羹と揺れてみる

十四郎

またひとつ水羊羹の忸怩あり

哲郎

釘さされなまなまとある水羊羹

亞子

梅雨明けて水ようかんの盛りかな

博子

恋めける二人で分けし水羊かん

良吉

募参り冷えたようかん子は共へ

博子

さみだれややなぎとシズクと水ようかん

洋一

雲白く青竹香り水羊羹

あずさ

街路樹に枇杷ある町や隅田川

芳清

隅田川夏至を過ぎたる近代史

十四郎

燕くる大川端の小学校

仁

隅田川父母の面影漂わせ

賢治

隅田川の縁暑かりき街無色

等

ざぶざぶと洗う黒鯛父在らず

真樹

十四郎

仁

亞子

裕

夏子

あすさ

等

哲郎

水無月に先を急がぬ隅田川

亞子

大川のエンジン音や梅雨晴間

智恵

大川の水量ゆたか白つばめ

夏子

隅田川眺む翁の像薄暑

真樹

戦火降りし大川端や梅雨に入る

清虚

船しぶく大川端の夏めける

良吉

鬼燈火の花二つ三つ隅田川

哲郎

隅田川屋形が通う右左

賢治

大川に黄金の之魂亀が鳴く

裕

風涼し花火はまだか隅田川

あすさ

隅田川水の流れと夕焼けと

洋一

忙しき日なれば閑古の声の泌む

清虚

下町やゆかたの取的自転車で

良吉

七月の小さき蟹の活気かな

智恵

このままでよかつた私に花微笑

博子

セーターを一枚残し更衣

芳清

屋形船行きかう川の花火かな

洋一

遙かなる夏の耳鳴り へ通りやんせ 哲郎

夏空へ玩具の喇叭を吹きちらす 等

更衣古女房の云ふままに 良吉

水羊羹つるりと逃げて初夏の街

仁

じゃんけんで決める分担梅雨茸

真樹

コロツケ屋キャベツ千切り 50円

亞子

昼下がりに台湾バナナ甘くなる

あずさ

濃紫陽花余りに小さき芭蕉庵

清虚

安居僧の背にスコールをやり過ごし

智恵

自転車で魚の行商額の花

夏子

梅天や煮干しの眼窩はがらんどろ

裕

五月雨や芭蕉稲荷の蛙かな

芳清

雨上がりあやめいちりん土手にさく

洋一

五月雨にびわの黄色味目を取られ
赤道届けプールよ五阡キロ

賢治
十四郎

百合の香が頭痛に重き般若経
穀象の畳のへりを今越える あずさ
腹筋のおとろえている 青葉寒む 真樹

西瓜一個地球空洞説を説く

十四郎

梅雨寒の芭蕉もただの男なり

仁

梅雨空や蓼アジサイに似た夫婦

博子

落雁のセロファン外す梅雨の入

等

あじさいに誘われて来し芭蕉庵

賢治

寺普請棟梁も説経走り梅雨

清虚

梅雨に入る此処寺町のえんま堂

良吉

御すわ太鼓盆地いつせい花吹雪

智恵

時の日やかからくり時計のうらおもて

夏子

紫陽花や少女はボケベル忍ばせる

亞子

古池の碑に寄り添って咲く紫蘭

芳清

枇杷の樹に枇杷の悲哀よ雨煙る

哲郎

事務局便り

●読者アンケートのお願い

編集部では「浄土」のより一層の充実を図るために、皆様にアンケートをお願いしております。

①七月号でもっともよかった記事。

②今後、掲載してもらいたい記事、希望する内容。

③法然上人讃仰会の活動として望むこと。

④その他、ご意見、ご感想など。

を、官製はがきまたはFAXで事務局までお送り下さい。もれなく記念品を差し上げます。どうぞご協力お願いします。(住所、氏名、電話番号をお忘れなく)

●新規会員募集のお知らせ

当会では随時新規会員を募集しています。檀信徒、お知り合いの方々にも本誌のご購読をお勧め下さい。年会費は六千円です。また、ご寺院の皆様方には一般会員へのご入会をお願いさせて頂いております。(年会費三万円)一般会員の方には本誌を毎号五部お送りしておりますので、一層読みやすく、楽しくなったこの「浄土」を是非とも

檀信徒教化にご活用下さい。

●新規会員紹介(敬称略、順不同)

〈購読会員〉

* 神奈川 小田原 松島定宣

* 宮城 石巻 川村てる

* 同 伊藤とみ

* 同 戸田佳子

* 同 斉藤たねよ

* 同 小野寺恒子

* 宮城 桃生郡 高橋重子

* 同 伊勢谷金治

* 同 関口ミヤ子

* 同 松坂かね子

↓アンケート、お問い合わせ、投稿は…

法然上人讃仰会

〒一〇五 東京都港区芝公園四一七―四

明照会館内

TEL 〇三―三五七八―六九四七

FAX 〇三―三五七八―七〇三六



いよいよ七月である。我々東京に住す寺の人間にとつては、誠に忙しい月の始まりである。

とは言つても、以前と比べると格段の差があるようだ。以前は、お盆といえは棚経のお檀家の家々を回ることが定番であり、それが終わるとすぐにお施餓鬼法要である。地域の寺のご出仕がすべて終わると七月もおわり。そんな月だった記憶が新しい。しかし今はどうだろうか。お盆と言つてもお棚経で回ってお寺さんは珍しい存在だ。またお施餓鬼といつても、ほとんどの寺がもうすでに五月に行つており、お盆がすめばすべて終り、ほつと一息がつける、それだけの月になつてしまつた。誠にありがたい。

こんな事を書けば、東京のお寺さんが相当楽をしているように思われ、各方面から苦情が来ること必定のようだが、事実楽をしている。

ただしこうだが、事実楽をしている。七月盆は世間一般は休みでなく、交通渋滞おびただしく、とても檀家の家を回つていられない、年々件数が減るばかりとあつては、寺に来て頂くほうがお檀家さんに差をつけずにすむ。また七月二十日近辺は記録的暑さを出すことが多い。クーラーのない本堂では倒れる方も続出する。これでは檀家さんのためにも、季節のいい時に大法要は行いたい。などなどいろいろあるだろう。

理由はともかくとし、お盆とは心がうきうきするほどの楽しい行事と説いている僧侶が、忙しさに我を忘れていたのではお笑いぐさである。余裕をもつて楽しい気持ちで過ごすことが、大事なことであると居直つたりしたら、やはり怒られるだろうか。

(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川 潤
齋藤 晃道
栗田 順一
村田 洋一
太田 正孝
石上 俊敬
佐山 哲郎

編集協力

オフイノ 頼代 代表 佐山 哲郎

編集顧問

大室了 暗

浄土

六十一巻 七月号 頒価六百元
年会費六千元

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷 平成七年六月二十五日

発行 平成七年七月 一日

編集人 宮林昭彦

発行人 牧田 諦亮

印刷所 株式会社 平文社

写真植字 株式会社 シーティーイー

〒一〇五 東京都港区芝公園四 七四明照会館内

発行所 法然上人 鑽仰会

電話 〇三三 五七八 六九四七
FAX 〇三三 五七八 七〇三六

実務上の都合により、送付配本が遅れがちになり誠に申し訳ありません。何卒ご了承の程お願い申し上げます。



ノドうつ うまさ。 黒ラベル

ただいま、渴いています。ビールを欲しがっています。

ノドが、体が…。さて、黒ラベル。プシュッ／ゴクゴクゴクゴク…。

「あーッ生きてよかったー!!」と、声のでる。

このうまさは、何なんだ。ノドたたく快感、

駆けぬける爽やかな味わい。1秒1秒が、

たまらない喜びに満ちている。

この黒ラベルの味、ひとこというと?

「ノドうつ、うまさ」それが黒ラベルです。

ビールは、20歳になってからあきかんはりサイクルへ

●協力の新聞にも自動販売機にも酒類の販売は後1時から午前5時まで停止されています。

新デザイン缶



サッポロ(株)黒ラベル

サッポロビール株式会社





使えるよなあ、こいつ。



こんどのパルサーは、 たのしい新実用主義。

○ いろんな機能性に、ヨロコビがあるのが新しいのだ。それが、
○ こんどのパルサーのたのしい新実用主義。しっかり遊ぶ、
○ しっかり仕事する。しっかり生活する。Mr.しっかりのこれからを、
○ 気持ちよくサポートします。

これ安心

● 運転席SRSエアバッグ
システム全車標準装備。



走る走る

● 改良、マルチリンクビームサスペンション(リヤ)。
● うれしい低燃費=1500X(13速フロアシフト)
18.3km/ℓ、1500XE-ZZ(13速フロアシフト)18.4km/ℓ(10-15モード燃費/
運輸省基準値)

らくちん

● 上質感のある、しなやかな乗りごころ。
● ゆったり室内スペース。

ツイてる

● 新型エアコン。
● トランク、ポケット等、収納性じゅうぶん。

パルサー4ドアセダン
1500CJ-1(13速フロアシフト)

131.3万円

パルサー4ドアセダン
1500X(13速フロアシフト)

148.4万円

上記価格にはメーカーオプション(スモークガラス)13.1万円が含まれておらず、別途加算。

上記価格はいずれも全国メーカー希望小売価格(税・北海道・沖縄)

Mr. しっかり 新パルサー誕生

【Mr.しっかり】日常フダ生活用。①新パルサーの別名。②新パルサーに乗る人の愛称。
③一状態……新パルサーでたのしい人生を送っている様子。

● PHOTO: パルサー4ドアセダン1500X1、ボディカラーはブルーイッシュシルバーM(※H01)。スポーツパッケージは
メーカーオプション。● 希望小売価格はスペアタイヤ・標準工具付。東京地区は1.7万円増となります。● 保険料、
税金(消費税含む)、登録等に伴う諸費用は別途申し受けます。● 希望小売価格は参考価格です。価格は販売会社が
独自に決めていますのでそれぞれの販売会社にお問い合わせください。● 3年度自動車お客相談認定 全国共通
フリーダイヤル 0120-315-232 ● お求めは、お近くのスカイライン、ブルーバード、日産ディーラー各販売会社へ。